

です。

チモピコティーシリーズ サーモンピ

ンク

中曽根さんは、トルコギキョウで前年に続き2年連続の優秀賞、金澤さんは、2020年にシクラメンで最優秀賞のフラワー・オブ・ザ・イヤーを受賞、前年に続き2年連続の優秀賞受賞となりました。

~~~~~

わたしの育種奮闘記

この記事は本人から聞いた内容を、本人の話し言葉で作成しています

3倍体で花の大きなリンドウを

世界で初めて実用化

苗を使ってくれる生産者の立場に立った育種をめざして

👤 **瀬戸啓一郎さん**：長野県のほぼ中央部、中央を天



竜川が流れ、西側に北アルプスの山々が連なる上伊那郡箕輪町で父が創業した有限会社スカイブルー・セットを引き継ぎ、リンドウを育種し、苗の販売と切り花を生産している

瀬戸啓一郎です。私は、農林水産省の農業者大学校を卒業して、23歳で就農しました。

切り花リンドウの栽培は、長野県の

農業改良普及員の勧めもあって父が始めました。好きな山登りで見るリンドウの花を見て商売になるのではと考えたようです。そして、我が家でやっていた米、豚、果樹をすべて手放してリンドウに転換してしまったんですよ。当時は、品種の概念もなかったし、山採りのリンドウを畑で作っていたのですが、市場から品質向上を求められるようになりました。昭和52年(1977年)に岩手県で初めて品種改良が行われ、父も新品種を開発すればさらに多くの買い手が増えると育種を始めました。その結果、昭和60年(1985年)に仲間と始めて育種した「奥信濃」を登録するなど、多数の新品種を開発することができました。

スカイブルー・セットを設立したのは、昭和63年(1988年)が、私が父の仕事に就く頃までは切り花生産のみで苗の出荷はしていませんでした。岩手県でリンドウの生産が増え、長野県も頑張ろうとの流れが起き、めずらしいリンドウを作りたいという生産者の要望が強くなり、農家にオリジナル苗の販売を始めました。でも、私たちが作った苗に農家に人たちの生活がかかっているの、私は苗を売ることに反対だったんです。しかし今は、責任の重さを痛感しながらもやりがいも感じています。

我が家の当初の育種は、交配したものを系統選抜して一代雑種の品種を育成するもので、花色も多岐にわたる品種を多数育成しました。リンドウは仏花としての利用が多いので、お盆や彼岸に需要が集中します。しかし、開花がずれることがあったので、仏花以外の需要を広げる必要がありました。また、リンドウはフラワーアレンジメントで洋花の他の花と合わせにくいと言われていました。そこで花の大きい存在感のある品種を

作ろうと、信州大学農学部の故中山昌明教授に相談し、各器官が大きくなる倍数体育種を行うことにしました。それは、通常2倍体のリンドウを薬品処理して4倍体を作り、その4倍体に2倍体を交配して3倍体を育成しようという試みでした。3倍体にすると稔実しくなることから、うまくゆけば他者に作られずに品種保護やすいからです。その結果、その育種開始から9年経った平成14年(2002年)に、リンドウでは世界初の3倍体品種「マイティラブ」を開発することができました。予想どおり、3倍体品種は大きな花となり茎葉のバランスが良く鑑賞性が高く、洋花とのアレンジでも好評を得られるようになり、フロリアード国際園芸博覧会で金賞をいただくこともできました。また、この3倍体品種の育成により、平成27年度



スカイブルーセトの9月咲きの主な品種

(2015年度)民間農林水産研究開発表彰で父と私は農林水産大臣賞を受賞させていただきました。

我が家で生産した苗は、秋田県、山形県、岩手県等の東北地方を主体に全国の生産者に販売し、切り花は名古屋、大阪などの各市場に出荷していま

す。プラグ苗の生産システムを確立して全国供給が可能となり、栽培マニュアルとともに各地に出荷しています。これまでに品種登録した品種数は77品種で、国内市場で25%のシェアを占めるまでになりました。リンドウは一部の地域でしか作られていない花でしたから、初めての人が作るのは困難なので農家を訪ねたりして栽培方法も教えるようにしています。

私は、父の仕事を引き継ぎながらも、時代のニーズに合った花づくりをしようと考えています。父が取り組んだ花や装花は見栄えが優れ、高い評価があるもの



の日常の暮らしに向かないという思いがあり、もっと小輪系や華やかな八重咲の花など、幅広く利用できる品種にも力を入れています。そのようなリンドウらしくない品種にも目を向け、スタンダードな品種などにも偏ることのない育種を心がけようとしています。

育種育成に当たっては、目新しいものも大事ですが、育てやすさを最も大事にしています。苗を育てる生産者がいてくれるおかげで、うちの仕事が成り立っているんですからね。スカイブルーセトのモットーは、花を使う立場になって育種をすることです。ですから、全く違う花にも視野を広げてインスピレーションを膨らませたりしています。でも、自己満足にならないよう花屋やお客

の意見も聞いて、構想が膨らんだらわが社のベテランの育種家とも相談してカタチにもっていくことにしています。これからも作ってくれる生産者に喜んでもらえる品種の育成に取り組んでいきたいと思ひます。

知られていない、育種経験もない

南半球の原生植物の品種開発に挑戦

稚樹開花性や四季咲き性を持つ

宿根ササゲ、テコマ、カシアの新品種を育成

🌿 **小林泰生さん**：平成 21 年(2009 年)に九州日観株式会社で新品種開発のために立ち上げたホルティック株式会社で、南半球の原

生植物の育種をし

ている小林泰生です。私は、山口大学農学部大学院を卒業後に福岡県職員となり、その 2 年後に農業総合試験場勤務となったことで育種の道に入りました。試験場では、主に切り花カーネーションの育種に取り組みました。



試験場を退職後、花を扱うことから 61 歳で始めた会社名に「園芸」の意味の「ホルティック」と名付けました。会社の略号の「HTK」は「ホルティーカーチャー テクノロジー イン 九州」

の頭文字で、「九州から園芸の新しい品種の波を起こそう」という思いで私がつけたものです。私が南半球の頭文字で、「九州から園芸の新しい品種の波を起こそう」という思いで私がつけたものです。私が南半球

地域の植物の育種を始めたのは、学生時代の恩師である有隅教授(現鹿児島大学名誉教授)がアルゼンチンに 6 年程滞在していた際、私が今育種を行っているジャカラランダなどを育種して、その様子をいろいろ教えてもらっていたことがきっかけです。そこで分かったのは、南半球に原生する植物は北半球と違って品種化された種類が少なく、温度や光(日長、日照量等)に対する生育反応等も異なるものも多く、花などを生活の中に取り込み、園芸を楽しもうとする習慣が少ないことから、新品種を育成・開発する育種的手法がほとんど施されていないのです。国が庭公園樹や街路樹として使用する林木(高木)では育種はしているようですが、日本のような園芸鉢物、庭園木の苗木などの育種はほとんどされていないようです。園芸品種となっているものが少なく、それらの植物は

我々には知られておらず、なじみが少ないこともあり、

それなら育種することによって、これまでになかった南半球原生植物の品種を作り出すことができるのではないかとの思いから育種を始めることにしたのです。

現在育種に取り組んでいる南半球地域の植物は、ジャカラランダ、イペー、テコマ、カシア(センナ)、宿根ササゲ、キンモウツツジ、クワなどです。私は、福岡県の試験場時代に育種に取り組んだ植物は切り花カーネーションのみなので、これらの植物は全く経験がないものばかりでした。しかも、園芸学の書物や百科事典にこれらの南半球の原生植物の情報はわずかしかなく、これまでの育種に関する資料や書物は全く参考になりませんでした。それで、最後の手段として、南半球に行ったことのある研究者や技術者の

人を調べて、それらの人達からそれらの植物のことを聞いて情報を得て、新品種開発に活かしました。まさに暗中模索の中からのスタートでしたね。

私達が日頃鑑賞している園芸品種は、元の原生植物から長い期間と多くの人手をかけて品種改良により作り出したものですから、私が行う育種も、園芸品種として生活に取り込めるものに改良する作業となりました。それは、南半球の原生植物を園芸品種



赤紫イペー

に生まれ変わらせる取り組みです。どのような特性を持つ品種を育成目標にしたかというと、1つは植物によっては数十年経った木からしか花が咲かないものもあるので、稚樹、つまり若い木でも花が開花する特性を持つもの、2つは北半球の寒さに耐える耐寒性を持つもの、3つは短日開花性を二期咲き性や周年咲き性にすること、つまり四季咲き性を持つこと、4つはたくさんの花が咲く多花性を持つようにすることでした。その育種は、ほとんどの人がどんなものかわからず、手がけたことのない植物でしたので、手探り状態でのスタートでした。その中で、ベネズエラ原生のマメ科の宿根植物に「クライミングエスカルゴ」と

いうつぼみや花がカタツムリのような形の花があるのですが、そのクライミングエスカルゴの種間交雑を行った結果、ある程度のノウハウを得られました。その後、ジャカランタ、テコマ、イペー、カシヤなどについても、こういった特性があるのか、交配のやり方や種子の結実・登熟はどうなっているのか、播種方法や苗の養成はどうしたらいいか、また水やりや施肥はどうすべきかなど、一通りの栽培作業の方法を試行錯誤しながら育種術を蓄えてきました。南半球の植物の育種の試みは、ほとんど行われていませんでした。そのため、雑種第3~4代まで交雑を繰り返すと、変異株の出現が格段に増えてきます。それに対して、しっかりした育種目標を掲げ、ぶれない目線で後代実生の選抜・淘汰を行うことが育種の楽しみでもあります。



鉢植えジャカランダ

そうすることによって、結果は自然についてくるんだということをおよそこれまでの育種から学ぶことができました。

これらの取組みを重ねた結果、マメ科のつる性で夏のスイトピーと呼ばれる宿根ササゲの「サンシェードブルー」を育成できました。テコマでは野生種の黄色系とオレンジ赤色系との種間・系統間交雑で育成した

「サンホルティキイ」、「サンホルティアカ」、「サンホルティダイ」の3品種を育成し、アメリカに申請して品種登録を受けることができました。更に、草丈30cm程度のコンパクトサイズで四季咲きするテコマの「ホルコレッド」、「ホルテコイエロー」の2品種を育成。また、カッシア類の三元交雑で育成した直立性の樹形で四季咲き性があり小鉢から大鉢まで応用できる品種として「インカの輝き」を品種登録することができました。

交配から、花が咲き鑑賞できるまでになる期間は、育種目標であった稚樹開花性をどのように達成するかを設定しており、対象植物によって異なりますが、概ね1.5~2年の苗、株で最初の花が咲き、その後毎年出蕾・開花するもののみを選抜しています。ジャカランダでは実生で1~2年、イペーでは実生で6~8か月、テコマでは実生で6~8か月、挿し木で1年、カッシアでは挿し木で3~6か月の期間となり、育種によってかなり短縮されました。

これまでに育成した品種は、市場で園芸・観葉植物を販売する親会社の九州日観株式会社に委託し、福岡県や西日本地域に販売しています。日本ではなじみのない品目なので、栽培場所、摘心・剪定方法、夏秋~冬春の管理方法等をラベル等を書いて販売しています。更なる普及や販売を促進を図るため、各地にある花き市場や開催されるトレードフェアなどへの出展、展示を行っています。

試験場退職時に設立されて参画した会社は、育成した品種の生産・販売が軌道に乗り、当初の目的を達したことから近く解散することにしてはいますが、私自身は今後も、品種開発に益々力を注いでいこうと思っています。

新品種を育成、誕生させることは育種家にとって最高の傑作であっても、もっと長いスパンで考えれば、それは1つの通過点で次世代に遺すべき貴重な遺伝資源だからこそ、それらの集積と取り組む姿勢や体制づくりが重要だとおもっており、そのことがあるから育種に対する意欲、情熱を維持してきてくれたと思っています。今後も、これまでに見たことのないような新しい品種を生み出していけるよう、精一杯励んでいこうと思っています。



活動歴

- 8/17 かわら版「育種の波動」13号発行
- 9/28 説明会の依頼・打合せで農水省訪問（岩澤）
- 10/27 出願審査要領・登録手続きの改正に関する説明会（オンライン開催）
- 11/24 植物品種等海外流失防止対策コンソーシアム運営委員会
(会場参加：岩澤、オンライン参加：林)



伝言板

 早いもので、今年も年の暮れとなりました。

コロナ禍

のもと、ロシアのウクライナ侵攻、安部前首相の

銃撃事

件、北朝鮮からの度重なるミサイルの発射、円安
等による物価の高騰など、暗いニュースもありましたが、
一方野球では、ヤクルトの村上選手が王選手を越える5
6本のホームランを打ち、サッカーの世界カップ
では、ベスト8
には入れませんでした。ドイツ、スペインと優
勝経験のある強豪を破って予選リーグ首位になり、更に大

リーグの

大谷翔平選手、ボクシングの井上尚弥選手、将棋
の藤井聡太棋士の活躍などの明るい話題もありまし
た。
皆さんにとっては、どのような1年だったでしょ
うか。
農業を全てリンドウ栽培に変え、育種にも取り

● 当かわら版も、今年はコロナ禍で少なくなった
ものの5
月21日に第12号を発行し、この14号ま
で3回発行
することができました。会員の皆さんの育
種の取組みで
は5人の方の紹介、様々な賞を受賞された
方の紹介、
育種家としての皆さんの取組みやその成果等を掲
載させていただきました。

● 今年、ジャパンフラワーセレクションでベスト
トフラワー
(優秀賞)を受賞された2人は、中曾根さんが2
年
連続、金澤さんが2年前にフラワーオブザイヤ
ー(最優
秀賞)、昨年と今年は連続ベストフラワーを受
賞された
ことになります。2人の素晴らしい快挙を共々
にお祝い
したいと思います。

● 育種の取組み体験は、リンドウの瀬戸啓一郎さ
んと
南半球の原生植物の小林泰生さんを紹介しまし
た。
瀬戸さんは、野山のリンドウに魅せられ、これ
までの
農業を全てリンドウ栽培に変え、育種にも取り
組んだ
お父様の先を見る英断もすごいと思いましたが、
これまでリンドウのタイプにとらわれず、生産して
くれる農家
の立場に立った育種に努力されていることが素
晴らしい
と思えました。小林さんは、どんなものかほと
んど分か
らない南半球の原生植物の育種に手探りで挑戦

し、
試行錯誤を繰り返しながら宿根ササゲ、テコマ、
カッサア
の品種を開発されました。その意欲、情熱に感
動しまし
た。

🌻このかわら版の「育種の波動」の名は、皆さん
の育種へ
の取り組みが会員や多くの人々、社会に大きな
波動を
与えていくことになるとの思いから名付けたも
のです。

「知ることは、それまでの自分を乗り越えるこ
とだ」と話し
た識者がいますが、このかわら版「育種の波
動」は、今後
も皆様に喜んでもらえる情報、元気を与える話
題の発
信に努めてまいります。ついては、皆様からの
声、話題、
情報、写真等の提供をよろしく願いいたしま
す。

来たる 2023 年が、当会及び皆様にとって素晴
らしい
年となりますよう、お祈りいたします。

**このかわら版についての意見、情報提供、感想、問
合せ先は次のとおりです。**

全国新品種育成者の会事務局

岩澤弘道

090-4059-1096

Fax 03-3691-2818

Eメール iwa.hinsyudebyu.512@gmail.com

かわら版「育種の波動」発行責任者